

講演会「言語研究と実証性」案内

2009年10月12日

表記の講演会を下記の通り開催します。ご来聴を歓迎いたします。

- 1 日時：2010年2月21日（日）12:30-17:20
- 2 場所：関西学院大学梅田キャンパス（阪急梅田駅茶屋町出口より徒歩5分）1405教室
(http://www.kwansei.ac.jp/kg_hub/参照)
- 3 資料代：1,000円（当日受付）
- 4 申し込み期間：2010年1月31日まで。定員80名（定員になり次第締め切ります）。
お申し込みいただいてから数日内にはご返事できるようにします。
- 5 申し込み・問い合わせ先（松井 涼 ryo-matsui-1223@hotmail.co.jp）
申込は、氏名、所属、連絡先を明記。
- 6 懇親会：5,000円。申し込みは上記と同じで、定員20名。定員になり次第締め切ります。

企画責任：関西学院大学共同研究費・科学研究費補助金基盤研究(B)による共同企画（責任者：西宮市上ヶ原一番町1-155 関西学院大学 八木克正）

プログラム概要

生成文法とは対極にある認知言語学、構文文法、意味論・語用論、語法研究、フレイジオロジー (phraseology) がそれぞれにどのような共通性をもっているのか、またどのような相違があるのかが明らかになるような議論にしたい。それぞれの分野の研究方法は、理論と実証についてどのような立場に立っているのか、実証のためのデータの収集方法やその利用法、という点を中心に、それぞれの立場から発言をする。意味論・語用論の立場から澤田治美、認知言語学・構文文法の立場から山梨正明、語法研究の立場から柏野健次、フレイジオロジーの立場から八木克正が講演する。各講師は40分ずつ講演し、10分の質疑、10分の休憩で、4つの講演を連続する。コメンテーターの大室剛志はそれぞれの発言を受けて、総括的に意見を述べる。（敬称略）

12:00 受付開始

司会・進行 神崎高明（関西学院大学）

12:30 開会

12:35 趣旨説明 八木克正（関西学院大学）

12:40 澤田治美（関西外国語大学）「意味論と語用論における実証性」

13:40 山梨正明（京都大学）「認知言語学の文法観と言語科学の実証性」

14:40 柏野健次（大阪樟蔭女子大学）「英語語法学のために」

15:40 八木克正「フレイジオロジー研究と実証性」

16:40 コメント 大室剛志（名古屋大学）

17:10 総括 八木克正

17:20 終了

18:00 懇親会

講演会趣旨

言語学研究者は、「言語とは何か」「言語学とは何か」という問題を避けて通るわけにはいかない。I-language/ E-language という言い方がある。言語とは、人の脳内にある(Internal language)という立場と、実際に発話されたものである(External language)という立場を表す言い方である。

前者の立場は、言語学を「人はいかにして言語を習得するか、脳内で言語はどのように表象されているか、言語は生成と理解においてどのように使われるか」を解明する科学であるとする立場である。すなわち言語内在主義といわれる。

後者の立場は、具体的な、すなわち、実際に使われた言語現象を主たる分析対象とする立場である。構文を捉えるとか、意味と構文の関連性を考えるとか、語と語の意味的關係を分析するとか、意味と形式の關係を分析するとか、コーパスを使って具体的な言語現象をとりあげ、そこに見られる規則性を分析する。

何もこのような言語二元論の立場に立つ必要はないが、仮にそう考えるとして、人はいかにして言語を習得するか、人が共有する普遍文法はどのようなものであるかを追及することだけが科学的言語学などと考える必要はない。人が使用する豊かな言語活動に目を向け、言語や言語表現の多様性に関心をもったり、人がいかにして多様な選択肢からひとつの表現を選んで表現するか、人の使う言語の中にどのような規則性があるか、意味と構文や形式の間にどのような関係があるか、語や成句どうしの親密度はどうか、談話と繋げるためにどのような発話を使っているかといった、具体的事実に基づく研究から得られることも多い。

具体的な言語事実をある種の理論・枠組みをもとに分析をする場合、その言語事実とは何を指しているのか、言語事実をどのようにして手に入れてそれを分析するのかといったことは、今切実に考えておくべき時である。理論と言語事実をどのように整合性をもたせるかということも重要な問題である。

言語を実証的に研究するとはどういうことか、実証性はどのように保障されるのか、実証するためのデータはどこから手に入れるのか、インフォーマントの役割をどのように考えるのか、ひとつでも例があればそれは用法として保障されるのか、実例はないがある用法が理論的に可能であることが「証明」できるのかなど、理論と実証性との関係性を考えると、いろいろな問題点が浮かび上がる。

このような問題に答えようとするのがこの講演会の目的である。さまざまな可能性を含んだ意味論・語用論、理論的にかなり確立している認知言語学・構文文法 (Construction Grammar)、日本で独自に発達してきた語法研究、古くて新しいフレイジオロジーの諸問題の立場から、それぞれの講師が独自の立場から講演する。

意味論・語用論における実証性

澤田治美 (関西外国語大学)

意味論と語用論はどちらも言語の意味を研究する分野である。一般に、意味論は、語や文の文字通りの意味を扱うのに対し、語用論は文字通りでないコンテクスト的な意味を扱う。それゆえ、「意味論的な意味」はコンテクスト抜きでも「正しい」意味にたどりつけるが、「語用論的な意味」はコンテクスト抜きでは「正しい」解釈にはたどり着けない。では、正しい(あるいは、最も適切な)意味解釈を実証(あるいは、論証)するとはどういうことであろうか。それはいかにして可能であろうか。

たとえば、次の例(1)の「意味論的な意味」の場合、下の2点、すなわち、(2A)と(2B)は論証可能である。

(1) *Drunks would put off the passengers.* (乗客たちは酔っ払いのために気分を害するだろう。)

(2)A: 主語の *drunks* (酔っ払い) の意味役割(semantic role)(もしくは、主題役割)は「原因」(cause) (もしくは、刺激(stimulus)) であって、「動作主」(agent)ではない。

B: *off* は、不変化詞(particle)として *put off* という句動詞(phrasal verb)(*put ... off/put off ...*)を形成しており、*off the passengers* (乗客から) という前置詞句を形成しているのではない。一方、次の例(3)では、主語の *drunks* の意味役割は「動作主」であり、*off* は、*off the bus* (バスから) という前置詞句を形成している。

(3) *Drunks would get off the bus.* (酔っ払いはバスから降りるだろう。)

(1)と(3)の *off* に関する統語論的性質の違いは幾つかのテストによって実証することができる。

それに対して、「語用論的な意味」を実証するには、コンテクストや話し手の意図との整合性が問題となる。たとえば、次のような例の場合、

(4) *Cats drink cream.*

「台所のクリームがないけど、どうしたか知らない？」と聞かれて、答えたような場合には、「うちの猫が飲んだ」といった解釈が可能であるが、それが唯一の「正しい解釈」であるというわけではない。すなわち、猫の一般的な性質について述べているだけで、誰が飲んだかまでは言うてはいないという解釈も成り立つ(「猫はクリームを飲む」(かといって、うちの猫が飲んだわけではない。))。

最後に、モダリティの解釈に際しては、意味論的な分析と語用論的な分析の両方が必要とされる場合が多い。たとえば、次の例(A.クリスティ『そして誰もいなくなった』第9章第6節から)において、

(5) The judge said:

'Someone could have left his or her bedroom --- later.'

(A. Christie, *And Then There Were None*) (下線筆者)

ロジャーズ夫人が睡眠薬で亡くなったことに関して、ウォーグレイヴ判事の推理によれば、ロジャーズ夫人が睡眠薬が効いて、意識が朦朧となっていた間に、何者かが「この薬を飲みなさい」と言って、彼女に飲ませ、死に至らしめたという。判事は下線部のように言う。意味論的には(すなわち、コンテクスト抜きでは)、下線部は(6)のAとBの2通りの解釈が可能である。

(6) 解釈A: 誰かが(やろうと思えば)自分の寝室を抜け出すことができた——もっと遅い時間帯に(しかし、実際には、抜け出さなかった/抜け出したかどうかはわからない)。

解釈B: 誰かが自分の寝室を抜け出したのかもしれない——もっと遅い時間帯に。

解釈Aでは「抜け出せたか、抜け出せなかった」がポイントであり、解釈Bでは「抜け出したか、抜け出さなかったか」がポイントである。どちらの解釈を採るかは、コンテクストしだいである。語用論の課題は、コンテクストから見て、どちらの解釈(たとえば、解釈B)が適切であるかを論証することである。

本発表では、様々な観点から、意味論と語用論における実証性について考えてみたい。

澤田治美 (さわだはるみ) 関西外国語大学外国語学部。研究書:『視点と主観性——日英語助動詞の分析』(ひつじ書房、1993)、『モダリティ』(開拓社、2006)。訳書: J. コーツ『英語法助動詞の意味論』(研究社、1992)、J.メイ『ことばは世界とどうかかわるか』(ひつじ書房、1996、共訳)、E. スウィーツァー『認知意味論の展開』(研究社、2000)、P. K. オースティン(編)『世界言語百科』(日本語版編集)(終風舎、2009)。

認知言語学の文法観と言語科学の実証性

山梨正明(京都大学)

生成文法に代表される言語学の形式的なアプローチでは、文法は有限の規則から成り、この規則の再帰的な適用により、文法的に適切な文の集合をアルゴリズム的に生成する規則依存型のモデルとして規定される。そして、この規則依存のアプローチをとることにより、無限に可能な文を生成していく創造的特質(すなわち、規則支配の創造性)が捉えられるとする。このアプローチの限界は、一見、標準的なデータとみられる言語事実の領域に対して仮定される規則(あるいは、一見、コアとみなされる言語表現に対して仮定される規則)の予測性にある。もう一つの問題は、いわゆる言語能力を、柔軟なコミュニケーションの運用能力や認知能力から切り離している点にある。この後者の視点からみるならば、規則それ自体も、根源的にコミュニケーションの能力や認知能力から問い直していく必要がある。言語表現の慣用度の相対性、プロトタイプ的な表現と拡張表現のグレイディエンス的分布によって特徴づけられる多様な言語事実を考慮するならば、いわゆる「規則」は、この多様な事実のうちの標準的に安定していると考えられる言語事実の一部を規定しているに過ぎない。認知言語学的アプローチでは、むしろ実際の言語使用の場から立ち現われるパターン(ないしはスキーマ)の一部として規則を捉え直していく。この点からみるならば、規則があらかじめ存在するのではなく、言語使用の場において規則が限定的に作り出され、状況によっては(例えば、創造的なコミュニケーションの文脈では)規則自体が改変され変容していくことになる。認知言語学の視点からみるならば、言語の創造性は、閉じた規則支配の創造性ではなく、規則の解体・変容のダイナミズムによって特徴づけられる開かれた創造性として見直していくことが可能となる。本発表では、以上の認知言語学の新たな文法観から、言語科学の実証性の問題を考察していく。特に、本発表では、日常言語を特徴づける多様な構文現象(慣用句、慣用化された発話の断片、修辭的定型表現、スピーチアクト・イディオム、比喩表現、換喩表現、提喩表現、等)のネットワーク分析に基づき、言語学の中核をなす文法研究の科学性と実証性の問題を問い直していく。

山梨正明 (やまなし・まさあき) 京都大学大学院人間・環境学研究科教授

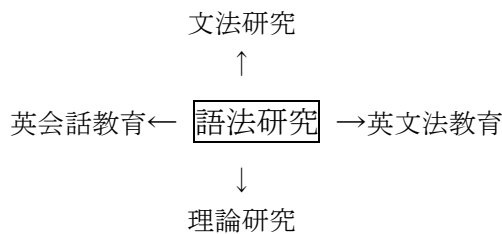
Ph.D. (ミシガン大学、1975) 専門分野は、認知言語学、語用論、記号論。日本認知言語学会会長、日本語用論学会会長、日本英文学会編集顧問。(主著):『発話行為』(大修館書店、1986)、『比喩と理解』(東京大学出版会、1988)、『推論と照応』(くろしお出版、1992)、『認知文法論』(ひつじ書房、1995)、『認知言語学原理』(くろしお出版、2000)、『ことばの認知空間』(開拓社、2004)、『認知構文論--文法のゲシュタルト性』(大修館書店、2009) ほか。(編著):『講座 認知言語学のフロンティア』(全6巻、研究社、編者)、『シリーズ 認知言語学入門』(全6巻、大修館書店、編者)。

英語語法学のために

柏野健次

本発表では、「語法研究を学問にまで高めるには何が必要で何を目指すべきか」という問題を投げかける。結論として、私たちが必要とするのは、方法論的に生じる語法研究であり、目指すべきは、ネイティブ・スピーカーの無意識の解明である。ネイティブの無意識の解明には外国語として英語を学ぶ日本人による語法研究が不可欠の存在となる。

下の図と関連させて言えば、語法研究はネイティブの無意識の解明を通して、文法研究・理論研究と相互補完し、「語法学」という学問を確立していく必要がある。また、その築かれた学問を次に教育面（英文法教育・英会話教育）へ適用することによって、応用科学としての一面を兼ね備える必要がある。



柏野健次（かしの けんじ）

略歴

神戸市外国語大学 外国語学部 英米学科卒業
神戸市外国語大学 大学院(修士課程) 英語学専攻修了
大阪樟蔭女子大学 教授

著書

『コーパス英文法』（共著、1991年、開拓社）
『意味論から見た語法』（1993年、研究社）
『テンスとアスペクトの語法』（1999年、開拓社）
『英語助動詞の語法』（2002年、研究社）
『エレメンタリー英文法』（共著、2004年、開拓社）
『英語学者が選んだアメリカ口語表現』（2006年、開拓社）

フレイジオロジー研究と実証

八木克正（関西学院大学）

言語習得は、音韻規則、形態論規則、統語規則などの抽象的なルールを習得することばかりではない。ルールの習得に先立って、具体的な語、語と語が結合した成句、文レベルの塊の習得が行われていることは明らかである。子供は最初に単語を覚え、その単語を結合し、具体的な場面で使うことによってその用法を習得してゆく。ルールの習得は単語や理屈抜きの語と語の結合、文の形をした表現の塊の習得を前提としている。

フレイジオロジーは、そのような前提に立って、どのような語がどのような語と結合しやすいか、新たな意味と機能をもつに至った語どうしの結合の分析、成句の中で特に特定の意味を担うようになった熟語（イディオム）、さらには諺にも関心をもつ。総体的に言えば、特定言語について「言語らしさ」（英語であれば「英語らしさ」）を追求することがフレイジオロジーの目指すところである。これらの習得はL1の習得ばかりでなく、L2の学習にも極めて重要である。

フレイジオロジー研究はコーパスの発達によって可能になった。従って、フレイジオロジーは実証的であることは自明のはずである。だが、コーパスを使っていれば実証的だとは限らない。利用するコーパスが当該言語の姿を本当に代表しているかどうか（代表性）、コーパスはどれほどのサイズが必要か（コーパスサイズ）、分析に必要なデータを十分にサンプリングしているか、分析が問題解決に必要十分に行われているか、「コーパスにある」とはどういうことか、**website**はコーパスの役割を果たすか、といったことは議論のあるところである。また、コーパスだけによって言語研究ができるわけではない。母語話者の直観とコーパスとの関係をどのように位置づけるかも問題になる。

実証的であることと理論との関わりも明らかにしなければならない。フレイジオロジーという名のもとで行われている研究は多様である。多様な研究方法・研究対象のある中で、私自身がとっている研究対象と研究方法とデータとの関係を述べることにする。

八木克正（やぎ かつまさ） 関西学院大学言語コミュニケーション文化研究科教授。専門分野は、英語学、英語のフレイジオロジー、英語音声学・音韻論。英語語法文法学会前会長、日本英語音声学会副会長、日本英語コミュニケーション学会理事。『新しい語法研究』（単著）山口書店、『ネイティブの直観にせまる語法研究』（単著）研究社出版、『英語の文法と語法—意味からのアプローチ』（単著）研究社出版、『英和辞典の研究—英語認識の改善のために』（単著）開拓社、『新英語学概論』（編著）英宝社、『世界に通用しない英語—あなたの教室英語、大丈夫？』（単著）開拓社。『ユースプログレッシブ英和辞典』（編集主幹）などの英和辞典・英語語法辞典の編纂者。2001年から『英語教育』誌QB回答者。